
白い闇と気まぐれな奇跡

トキ イチロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い闇と気まぐれな奇跡

【Nコード】

N0385K

【作者名】

トキ イチロ

【あらすじ】

ツイてない時は、とことんツイてないもの。

最悪な状況の男。彼の元に舞い降りた奇跡とは。

第四回 5分企画参加作品です。

どんな願いでも一つだけかなえてやる。

そんな事を言われたら、何を願うだろうか。その答えは、きっと状況に左右されるだろう。命の危険が迫っていれば、そこから助かろうとするだろうし、金に困っていれば迷わず金が欲しいと答える。

その時の俺は、最悪な状況にあった。

人里離れた深夜の山中。その夜は大雪だった。

俺の乗った車は雪でスリップし、岩壁に激突。幸い俺に怪我は無かったが、車はまるで動かなくなった。

「ちくしょう！」

幾度もキーを回すが、セルモーターの音もしない。どうやら電気系統がやられているらしい。

仮に助けを呼ぼうにも、こんな山奥では誰もいるはずもない。携帯電話だって使えない。もしかしたら、他の車が通りかかるか、とも考えたが、すぐに思い出した。この道を都合がいいと知っている俺は、車両通行禁止なのを無視して入ってきたのだ。つまりは、後続の車は期待できない。

何とか動いてくれ、と祈るような思いでキーを回し続けているうち、ひやりとした寒気が足元からのぼってきた。俺はそこでようやく気付いた。

このままだと凍死するんじゃないか。

ここは雪に閉ざされた山奥なのだ。

車が動かないということは、暖房も使えない。まだ車内に暖気は残っているが、鉄のカタマリである車は、すぐに外と変わらないほどに冷え込むはずだ。こんな日の夜中にキャンプに来た訳でもない俺は、寝袋や毛布といった便利なものは準備していない。

俺は、ここにきてようやく、というべきか、事の重大さに気付き、めまいを覚えた。

動揺を何とか静めるべく、必死に自らに落ち着け、と言いつくせ。だが、不意におとずれた死の恐怖が、どうしても思考を占領してしまう。

死にたくない。

そう思えば思うほど、恐怖は焦りを伴って広がっていく。

しかし、こういう時こそ落ち着かなければならない。そう思った俺は、まず明かりを探した。深夜の雪山は海の底のように暗い。闇は俺を不安にさせ、恐怖心を増幅させる。

明かり。明かりが欲しい。

俺は二つ折りの携帯電話を開いた。目を刺すようなディスプレイの光。ルームミラーに浮かんだ俺の顔は、恐怖に歪んでいる。酷い顔だ。

だが、明かりがあるだけで、随分と気の持ちようが違う。ホッと息をついた俺は、これからどうするべきかを考えた。息はもう白くなりつつある。

闇の雪山。極寒の外に出て助けを求めるのは自殺行為に近い。

やはり、車内で待つしかない。

そう考えた俺は、シートの上で膝を抱え、身体を縮めると、息を

ひそめた。

次第にフロントガラスが雪に覆われていく。このまま車ごとすっぽりと雪に埋もれてしまいそうだ。しかし、こんなところで凍え死にそうになるなんて本当に馬鹿みたいだ。雪が溶けた頃に死体が見つかったら、俺は間抜けな奴として知れ渡るだろう。そんな自嘲の念さえ浮かんでくる。

……どのくらい時間が経っただろうか。

時間の感覚もなくなってきた。事故を起こしてから随分と経った気もするし、ほんの一瞬のような気もする。その間、俺は携帯を明かり代わりにしながら、うつろな目で、手ごたえのないキーをずっと回し続けていた。

寒い。暗くて寒い。

さつきから震えがとまらない。奥歯がガチガチと音をたてる。

なにか暖かいものが欲しい。風呂、布団、火。そういえば、童話にそんな話があったな。『マッチ売りの少女』か。マッチの火さえ俺にはない。

だんだん、まぶたが重くなってきた。身体感覚がもう無い。限界だ。

うおおお!!

俺は絶叫した。狂い、叫んだ。

衝動的に車のドアを開け放つと、外へと出た。眼前にはただ闇があるだけで何も見えず、身体じゅうに吹き付けられる雪の冷たさを感じる。だが、不思議と寒くない。

俺はもう一度叫び声を上げて、走った。ヒザまで深く積もった雪が重くて、なかなか前へ進めない。それでも懸命に足を動かして、前へ前へと進む。

「死んでたまるか」

俺は発狂したようにそう叫びながら、闇へと進んだ。そこに何かある訳でもないのに。

いや、何かあったのだ。

俺はその『何か』に盛大にぶつかつた。目の前から、ドサリと雪が落ちる音。落ちた雪の間から、光を放つ『何か』が見えた。俺は無我夢中で『何か』に張り付いた雪を払つた。
現れたのは。

「電話……ボックス？」

暗闇の中、蛍光灯が不規則に瞬いている。それは眩しいくらいだった。

俺はその明かりに魅入られたように中に入った。

なんだ、これは。

奇妙だった。電話にはプッシュボタンが一つしかないのだ。そして、その下に添えられた、不可解な文章。

『神。どんな願いでも一つだけ叶える』

意味不明だ。だが、好奇心に似た感情を俺は抑えられない。恐る恐る受話器を上げて、耳に当ててみる。

ツー。

音がする。生きている。

俺は震える指で、一つしかないボタンを押した。呼び出し音がする。

もしもし。

誰が出た！ なんとはいいいのか。

しかし、俺が考える間もなく、先に相手がしゃべり始めた。

困っているようだ。よし、一つだけ、どんな願いでもかなえてやる。

「は？」

なぜ相手は、俺が困窮していることが分かるのか。いや、それよりも、もっとおかしな事を言っている。願いを叶える、だと？

二の句が告げられない俺に構わず、そいつはさらに話を続けた。

神である私が、お前の望みを何でも一つだけかなえてやる、というのだ。信じられないなら、ためしに奇跡を見せよう。

俺はまるで思考が追いつかない。そんな言葉を失った俺の額に、コツンと何かが当たり、足元に落ちた。

マッチだった。

どうだ。今のお前に相応しいとは思わないか。

受話器から乾いた笑い声が聞こえてきた。

「まさか」

信じたかね？

「どんな願いでも……いいのか？」

無論だ。一つだけなら、金でも、なんでも。

正直とても信じられない。極限状態が見せた幻か。だが、この状況では信じるしかない。すぎるより他にない。

どんな願いでも一つだけかなえてやる。そんな事を言われたら、何を願うだろうか。

命か。金か。

いや、俺の願いはたった一つだ。

「トランクの中に女がいるんだが、俺がそいつを殺したって証拠を、すべて消してくれ」

そうなれば、携帯で助けが呼べる。

(後書き)

第四回 5分企画参加作品です。

ぜひ他の参加者さまの作品もご堪能下さい。

最後に、この機会を設けて下さった主催者さまに御礼申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0385k/>

白い闇と気まぐれな奇跡

2010年10月9日01時43分発行